

世界を「数字」で回してみよう 人身事故(29):

大いなるタブーなのか——人身事故を真面目に検証する

<http://eetimes.jp/ee/articles/1604/25/news020.html>

電車を日常的な移動手段にしている者にとって、疲れ果てている時、急いでいる時に発生した人身事故ほど、心が疲弊するものではありません。ですが、声を大にして人身事故を批判することはタブーである、という暗黙の了解が、なぜか存在するのです。今回から始まる新シリーズでは、この「(電車での)人身事故」について、「感情的に」ではなく「数学的に」検証したいと思います。

2016年04月25日 11時30分 更新

[江端智一, EE Times Japan]



「世界を『数字』で回してみよう」現在のテーマは「人身事故」。日常的に電車を使っている人なら、一度は怒りを覚えたことがある……というのが本当のところではないでしょうか。今回のシリーズでは、このテーマに思い切って踏み込み、「人身事故」を冷静に分析します。⇒連載バックナンバーは[こちらから](#)

心身ともに疲れ果てて、帰宅している途中の電車の中のことでした。

退社時に電子メールで提出した資料は、今頃、上長がチェックしているはず。私は帰宅後、自宅のPCでそれを受けとり、修正して、明日の朝に再提出しなければならない——そういうことが、既に数日間も続いていました。

いわゆる「修羅場」というヤツです。

『インターネットは、絶対に私を不幸にしている』と思いながら、満員の電車の中で押しつけられ、ドアの前の手すり棒にしがみついて、電車で揺られていました。

吐きそうなほど体がダルい。一秒でも早く自宅に到着して、布団に倒れ込みたい。たとえ、1時間でいいから仮眠を取りたい——と、考えていた時、まさにその時、突然電車が停車し、アナウンスが流れてきました。

「23時50分頃、〇〇駅にて、人身事故が発生しました。この為、この電車は駅のホームに入ることができないため、ここでしばらく停車致します。復旧の時間は現時点では不明です」



画像はイメージです

その瞬間、車内は、どんよりとした失意の空気が流れたのを覚えています(と、同時に、お互いに顔を見合わせてため息をつけるような、かすかな共同体意識も発生していたように思います)。

そんな中、失意でもなく、ため息でもなく、ましてや共同体意識など発生するわけもなく、ただ1人、暗く青白い炎の憎悪をたぎらせて、どす黒い邪悪なオーラを発していた人物がいました。

私です。

□

こんにちは。江端智一です。

今回から新シリーズ、「人身事故を「数字」で回してみよう」を始めたいと思います。

EE Times Japanの編集長のTさんとMさんのお2人にお会いして、この提案をした時、『この人、本当に、どこから、そういうネタを思い付くんだらう』という表情をされていたのを覚えています(結局O.K.を頂きましたが)。

このシリーズをやりたいという理由は3つありました。

第一は、「腹が立たないか？」を検証したいからです。

冒頭にお話した、私の激怒 ——ではなく、今回、私が強く興味を感じることは、私が「心底腹を立てている」のに対して、私以外の人が、人身事故を「かなり寛容に受けいれている」ことです。

職場でこの手の話をすると、彼らは、いつだって、

『地震や台風の被害に対して、地震や台風を相手取って、損害賠償請求の訴訟なんて起こせないよね』

という感じの話し方をするので。

私が「怒り」を感じるのは、「浅学、卑怯(ひきょう)、狭量」という私の性格上の問題であることは、よく分かっています。

それでも私は、『なぜ私以外の多くの方が、そのような寛容性を発揮できるのか』が、理解できないのです。

『人身事故の責任は、—— 生死を問わず —— 人身事故を発生させた当事者にあるに決まっとうが』

と、私なんぞは思うのですが、そのような論調で記載された文献、書籍はもちろん、無責任な言動であふれ返るネットの掲示板にさえ、それを見つけることは難しいのです。

私のように考える人は、本当に全然いないのか？あるいは思っただけで黙っているのか？では、黙っているとしたら、そのメリットは何か？そもそも、人身事故の発生当事者に対して、法による処罰は不可能なのか？*)

*) 現行法では、死者は刑法上の刑罰の対象にはなりません。

私は、私の「怒り」が妥当なものであるのかどうか、あるいは世間一般の人の感性と、どれだけ乖離(かいり)しているのかを、定量的に知りたいと考えています。

「いくら」なのか、「なぜ」なのか

第二は、「いくら？」です。

人身事故によって引き起こされる「現実の金銭的損害」は、どの程度なのか、私は知りません。

人身事故によって影響を受けた人数は、マスコミなどの「この事故によって、約1万人の足に影響が出ました」というフレーズでまとめられます。

ですが、そもそも、この「1万人」という数字を、どうやって算出しているのかも私は知りません。

さらには、このような人身事故の影響は、ドミノ倒しのように広がって、当然に多くの人の予定や計画を狂わせていくはずですが、人身事故を直接の原因として、会社が倒産したとか、失職したとか、失恋、離婚したという話は、(あるかもしれませんが)聞いたことはありません。というか、そういうイベント(事象)で把握すること自体が、極めて難しいことも分かります。

もちろん、学術的な研究による試算結果もあるようですが、結局のところ社会全体の被害として把握されています。

しかし、私は、この「人身事故による現実の私の金銭的損害」を、自分の手で計算してみたいと考えています。

そして、第三は「なぜ？」です。

今回の連載を始めるに際して、私は、この「人身事故」を含めた自殺全般に関して、統計データ、具体的な自殺事件、自殺後に発生するコスト、自殺に関する国民性の違い、宗教的背景など、さまざまな本を読みまわりました。

今、わが家には、図書館から大量に借りてきた「自殺」という見だしの付く本が、散乱しています*)。

*) 家族には連載の話は通してあるものの、娘は、「パパって、本当に『自殺』が好きだよね」と冷たい声で私に言い放ちました。以前、後輩から『[江端さんって、ナチズムの信奉者なのですか？](#)』という、ものすごい質問を受けたこともあります。

これらの本や、いろいろなネットサイトの記事やコラムを読みまくった結果、(まだ主観の域を出ませんが) 鉄道を使った人身事故(による自殺)は、他の自殺とは、少々違うように思えるのです。

うまく言えないのですが — 他の自殺より、軽い — といった感じでしょうか。この“軽さ”というキーワードは、頭に入れておいてください。

ひとつとではなかった人身事故

ところで、この機会に告白してしましますが、私、「人身事故(未遂)」の当事者なのです。

その当時、私には達成したい一つのライフプランがあったのですが、それが、何年たっても思うように進めることができず、ひどく落ち込んでいました。

そして、それは、「もう、本当に、ダメな奴だなあ」という自分自身へのつぶやきが、総計1000回くらいを超えたころだったと思います。

それでも私は、自分がそんなに思い詰めているとは思っていなかったし、その時点においてさえ、「自殺は最低最悪の選択」「人身事故は最大級の社会悪」であることを合理的に説明できるだけの理性があったと確信しています。

しかし、私はその時、『私の意思に反して、私の足が勝手に、私の体をホームから落下させようとする』という人生初の「制御不能」を体験することになります。

— おい、よせ! やめろ!! 何しているんだ、バカ! バカ! バカかお前は～～!!!

と、心の中で叫びながら、それでも、ホームから線路に落ちていこうとする私の体。



その私の体を止めたのは、たまたまそこにあったホームの柱でした。

私は下半身の暴走(なんかエロい意味にも読めますが)に対して、上半身の理性(両腕)が柱にしがみつくと、本当に運よく、私は疾走する急行電車の「人身事故の当事者」となることから、免れることができたのです。

秒速20メートルで疾走する電車を目の前に、私は青ざめてへナヘナと座りこんでいました。

この「制御不能」の恐怖の体験は、私のパラダイムシフトになりました。

「人間の脳は、かくも簡単に壊れる」—— くしくも、前回のダイエットシリーズの連載の、[江端智一「拒食症疑惑」](#)によっても追検証されることにもなりましたが —— ことは、秒速20メートルで疾走する320トンの物体に、自分の意思だけで0メートルまで接近できるという理想的な環境下で、最大の効力(自己の破滅)を発揮させるのです。

要するに私は、私自身の体験だけを理由に、「人身事故による自殺は、他の自殺とは異なり、発生しやすい」という仮説を立てて、「なぜ、発生しやすいのか」を含めて検証したいと考えているわけです。

□

さて、ここで、既に気が付かれた方もいらっしゃるかと思います。

「江端が、人身事故(未遂だけど)の当事者であるなら、(冒頭の)江端による他の人身事故

の当事者へ「怒り」の発動は、矛盾しているじゃないのか？」——と。

その通り。

これは、いわゆる「五十歩百歩」程度の諺(ことわざ)では足りず、

「客として、ソープランドでそのサービスを受け終った中年男が、そのサービスを提供してくれたお姉さんに対して、性モラル低下について説教をする」

と、同程度に最低にして下劣な行為である、と、この私でさえも思います。

しかしながら、「人身事故」には、そのような「定見のなさ」というか「軽さ」の要素が、他の自殺よりも大きいのではないかと感じているのです(私だけかもしれませんが)。

ならば、そういう矛盾したロジックを抱えている私こそが、この「人身事故」を、モラル、宗教、病気、社会情勢、個人的事情、これを全部超えたところで、全体像を把握するのにふさわしい人物であると思うのです。

長い序文でした。

それでは、「人身事故を「数字」で回してみよう」を始めたいと思います。

「3万」という数字が示すもの

まずは、人身事故の検討に入る前に、わが国の自殺の状況を全体的に把握してみましょう。

とはいっても、自殺研究は既に長い間、多くの人によって行われて分野でもありますので、ここでは、私の独自の視点から全体把握を行ってみます。

わが国は長い間(10年以上)、年間3万人の自殺者を出してきたという実績があります。

最初は、この「年間の自殺者3万人」の意味について考えます。

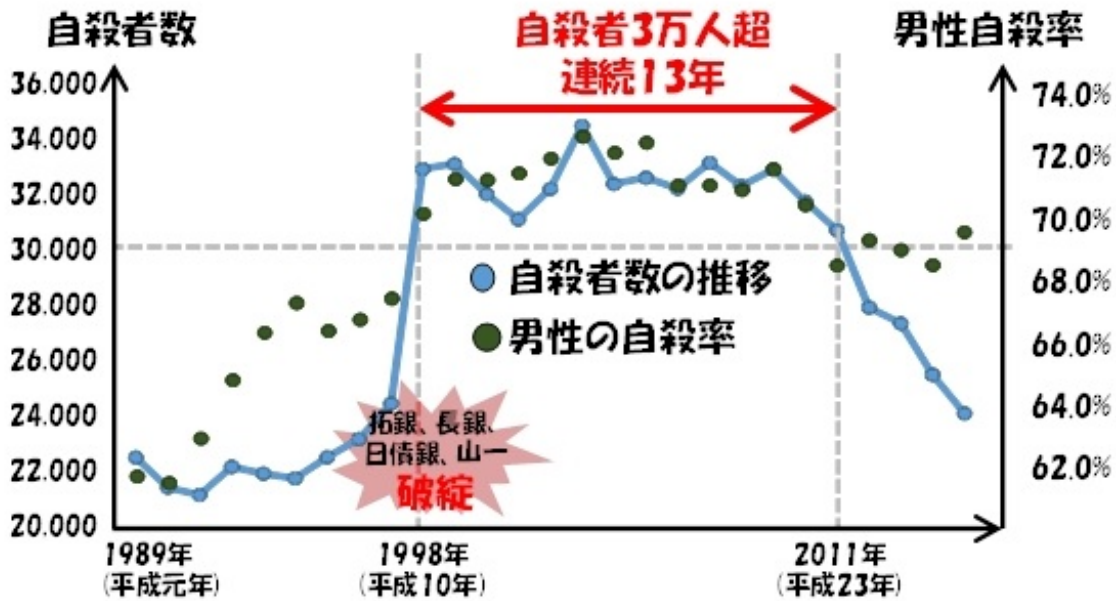
「3万人」と言われると、確かに『おおっ!』と、その数の大きさにビックリしますが、しかし実際のところ私は(そして多分あなたも)、この「3万人」の数の意味(または意義)は理解できていないと思うのです。

なぜなら、私は「2万人」と言われても「1万人」と言われても、逆に「10万人」と言われても、やっぱり、同じように『おおっ!』と言うと思うんですよ。

つまり —— 3万人という数字の意味が分からん

なお、年間自殺者3万人の時代は、1998年から13年間続きました。平成24年(2012年)以降は自殺者数が徐々に減り、ようやく今、「3万人時代」の前の水準に戻りつつあります。

自殺者数 / 男性自殺者の比率



連続13年間、3万人超

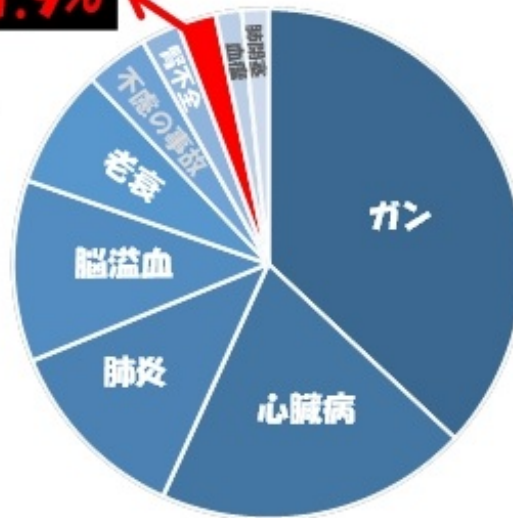
なお、男女比を調べてみたところ、「男は自殺しやすい」ようです。これは日本だけではなく世界共通の傾向として見られます男は(後述)。

ところで、(今回調べるまで気が付かなかったのですが)、自殺による死者数は、全ての年間死者数に対して小さいです。大体、100人中2人くらいです。

年間死亡者数に対する自殺者の比率

自殺 1.9%

全自殺者数: 2万4千人
全死亡者数: 127万4千人
(2015年データ)



「100人中2人」を、どう評価するか？

日本の自殺率は世界で何位なのか

さて、『「3万人」の意味』検討に戻ります。

何から始めれば良いのか分からなかったなので、まずは世界各国での [自殺率の比較](#) をしてみました。

(江端のチョイスした)世界各国の自殺率^(*)

(*)年齢調整自殺率

順位	国名	10万人あたりの自殺者数			
		全体	男性	女性	男/女の比率
1	ガイアナ	44.2	70.8	22.1	3.2
2	韓国	28.9	41.7	18.0	2.3
3	スリランカ	28.8	46.4	12.8	3.6
11	インド	21.1	25.8	16.4	1.6
14	ロシア	19.5	35.1	6.2	5.7
18	日本	18.5	26.9	10.1	2.7
47	フランス	12.3	19.3	6.0	3.2
50	米国	12.1	19.4	5.2	3.7
70	カナダ	9.8	14.9	4.8	3.1
77	ドイツ	9.2	14.5	4.1	3.5
94	中国	7.8	7.1	8.7	0.8
105	イギリス	6.2	9.8	2.6	3.8
128	イタリア	4.7	7.6	1.9	4.0

G7先進国の中では、日本はワースト1位

上の表では、日本はワースト18位になっています。

なお、この表では、年齢調整自殺率というものを採用しています。日本は高齢化社会なので、単なる自殺者の人数で数え上げると不公平となるので、年齢人口で補正をした値にしたものです。単純な「10万人あたりの自殺者数」とすると、日本は一気にベストテン入り(7位)してしまいます。

現在、世界第1位のガイアナは、人口77万の小国で、たった7人の自殺で、ポイント+1になるという、世界一自殺率が変動する国(2004年45位→2008年9位)ということで、今回は検討対象外とします。

また、インドは他の国と比較して女性の自殺率が高く、そして、驚くべきことに中国では、女性の自殺率の方が高いのです(調べたら、中国以外にも、パキスタン、バングラデシュ、インドネシア、イラクの4カ国のみが該当(170カ国中))。

そして、自殺率のデフェンディングチャンピオンは、お隣の国、韓国です(OECD(経済協力開発機構34カ国)で2003年から連続第1位)。出生率の悪さでは、日本も韓国と同様の世界のワースト国ですが、自殺率の高さでは、韓国はブッチギリのトップです。

一方、日本も、先進7カ国(G7)の中では、ワースト1位(18.5人/10万人)です。しかも、他

のG7各国を思いっきり引き離しての第1位なのです。

私、これまで、たまたまG7の各国出身の人たちと一緒に仕事をする機会があったのですが(といっても、1人か2人くらいですけどね)、その中でも一番、仕事がしやすいなあと感じていたのがドイツ人でした。

私は、わが国が、先の大戦で枢軸国としてドイツと同盟を組んだのには理由があったと思っていました(イタリアのことは忘れる)ので、今回の、ドイツの自殺率(9.2人/10万人)を知って裏切られたような気持ちです。

日本と同様に、勤勉で真面目な国民性なのに、自殺率が低くて、ずるいじゃんか ーと。

また、イタリア(4.7人/10万人)の4倍も多くの自殺率となっているのも、面白くありません。頼んでおいた顧客打ち合わせのセッティングを忘れて、のほほんとしていた、あの野郎を思い出していたらー だんだん、腹立ってきました。

それはさておき。

どうしても「3万人」の数字的意義が分からないので、私は考え方を变えることにしました。

『日本で、あとどのくらい自殺者が出てしまうと、デフェンディングチャンピオンである韓国を抜いて、世界ワーストワンに踊り出してしまうのか』ーと。

年齢調整をしない自殺率では、韓国(36.6人/10万人)ですので、これを日本の人口から算出すれば、年間4.7万人(2015年現在現在2.4万人)の自殺者という計算になります。

『4.7万人なんて数が大きすぎて、日本は、韓国には到底追い付かない』と思いますか？

実は、わが国では、1998年に、たった1年で自殺者が9000人増えたことがあり(前述のグラフ参照)、2003年には(男性のみの自殺率ではありますが)「38.0人/10万人」の自殺率をたたき出しています(韓国:36.6人/10万人)。

そのデータだけを見る限りでは、瞬間風速的ではありますが、韓国(2015年)の自殺率を超えているのです。

つまり、

日本は世界第1位の自殺大国になるポテンシャルを十分有している ー

と考えるべきでしょう。晴れて世界第1位になった暁には、「世界一不幸の国、日本」というイメージを、世界に発信することになるでしょう。

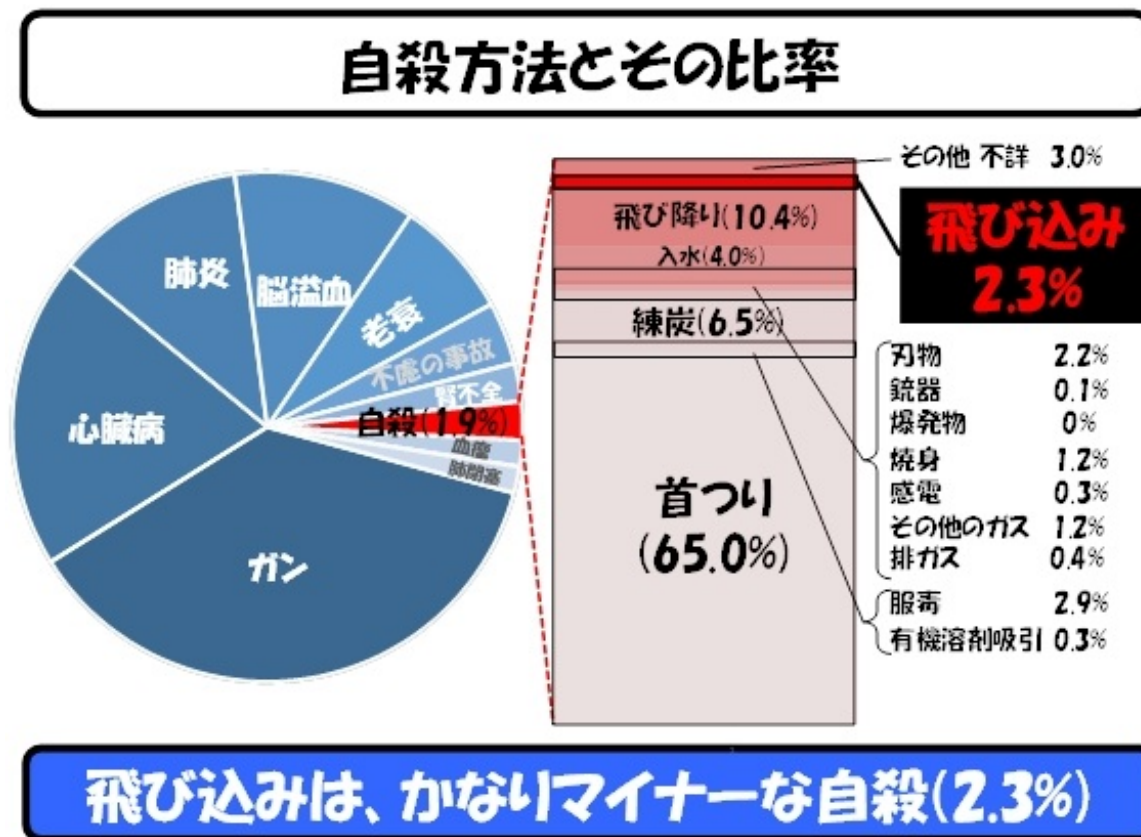
このように考えれば、自殺者3万人という数字は、世界的水準から見ても、相対値ではなく、絶対値としても絶望的に悪い、と言えます。

わが国は、経済大国を称し(あるいはかつて称してい)た国として、世界から嘲笑を受け、面目丸つぶれの「絶望国家」に成り下がるというリスクを、いつでも背負っているのです。

こんなところで、『「3万人」の意味』の検討はここまでとします。

人身事故による自殺の発生件数は

では、ここからは、人身事故による自殺は、一体どのくらい発生しているのかを、内閣府が発行している「自殺対策白書」から見てみます。

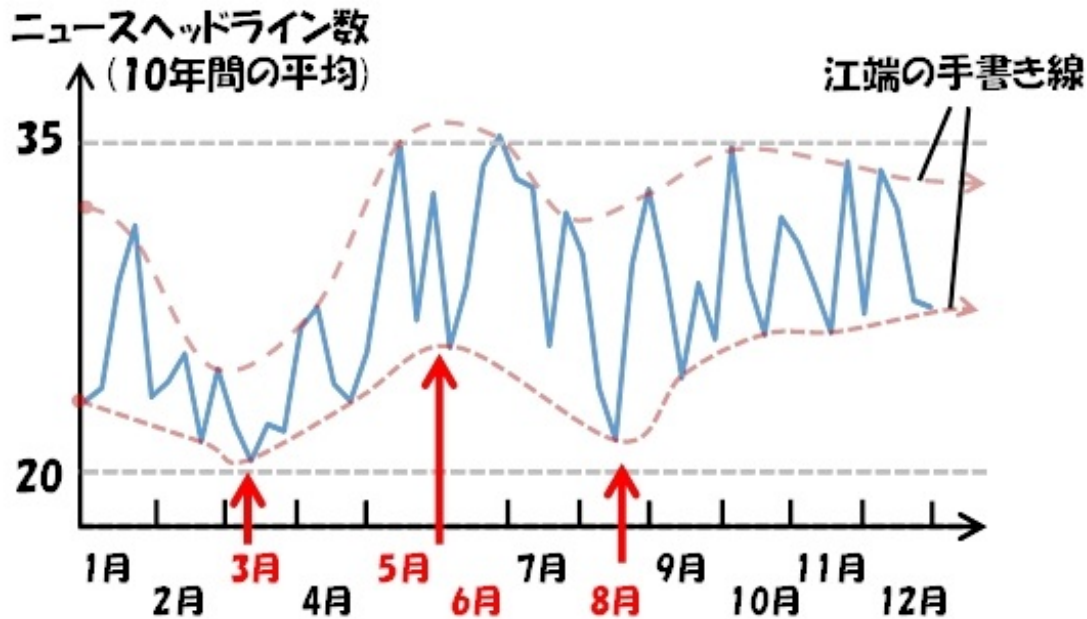


自殺の中でも、「首つり」は、最もポピュラーな自殺方法で、全体の半分以上(65%)を占めています。比して、「飛び込み」は2.3%と比較的マイナーな自殺方法です(ちなみに「飛び込み」の対象は、鉄道だけではなくトラックなどもあるようですが、ニュースヘッダ数などの比較から、暫定的に、ここでは鉄道の「人身事故」と見なすことにします)。

さて、この「人身事故」が、一年間でどのような変動をするのかを調べてみました。

これはGoogleトレンドを使って、1年間で「人身事故」という文字が出てきたニュースヘッドラインの数を、1週間単位に分けて、過去10年間分を平均したものです。

過去10年間の「人身事故」のヘッドライン数



これは「社会人」の傾向ではない…？

このグラフを作って見た瞬間、私は違和感を覚えました。

自殺にはいろいろな原因がありますが、なんだか言って、その中でも大きい要因は「金」です。

借金、経営難、不渡りなどですが、これらは、年末(12/31)、または年度末(3/31)あたりで、にっちもさっちも行かなくなり……という経緯をたどることが多いのです(この辺の話は、かつて銀行員で融資を担当していた嫁さんに聞いた)。

「人身事故」が、3月に減って、5~6月に上昇し、また8月に下降する、というのは、どう考えても、普通の社会人の行動としては違和感があるのです。

—— 一体、誰が人身事故を発生させているのか？

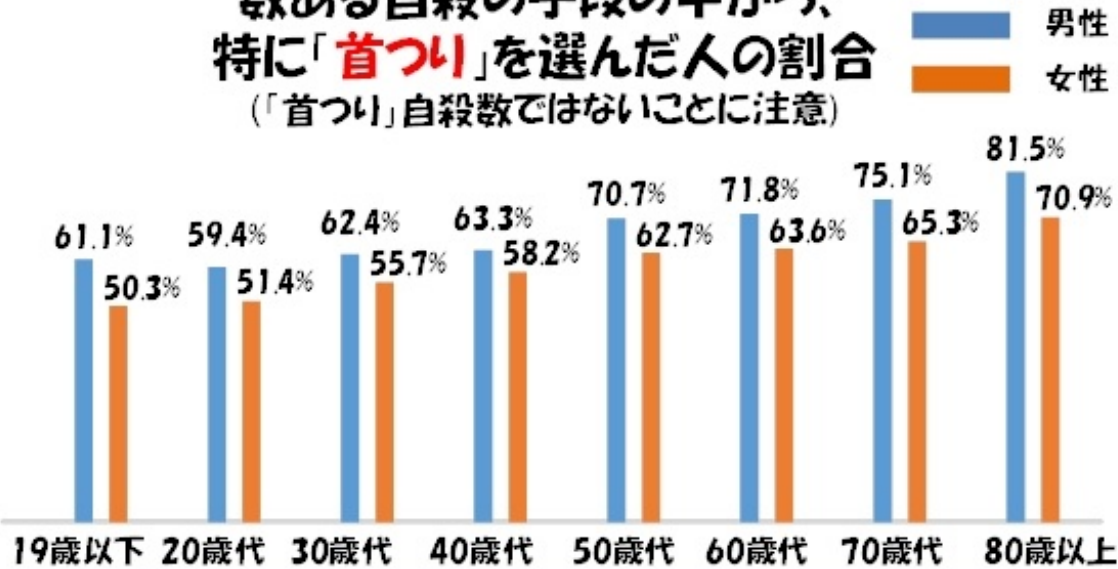
誰が人身事故を発生させているのか

そこで今度は、各年代が「どの方法で自殺を選んでいるのか」を調べてみました(第1-29図 平成26年における男女別・年齢階級別(10歳階級)・自殺の手段別の自殺者数の構成割合)

まず、最もポピュラーである「首つり」の傾向を見てみましょう。

各年代の「首つり」自殺の割合

数ある自殺の手段の中から、
特に「首つり」を選んだ人の割合
(「首つり」自殺数ではないことに注意)



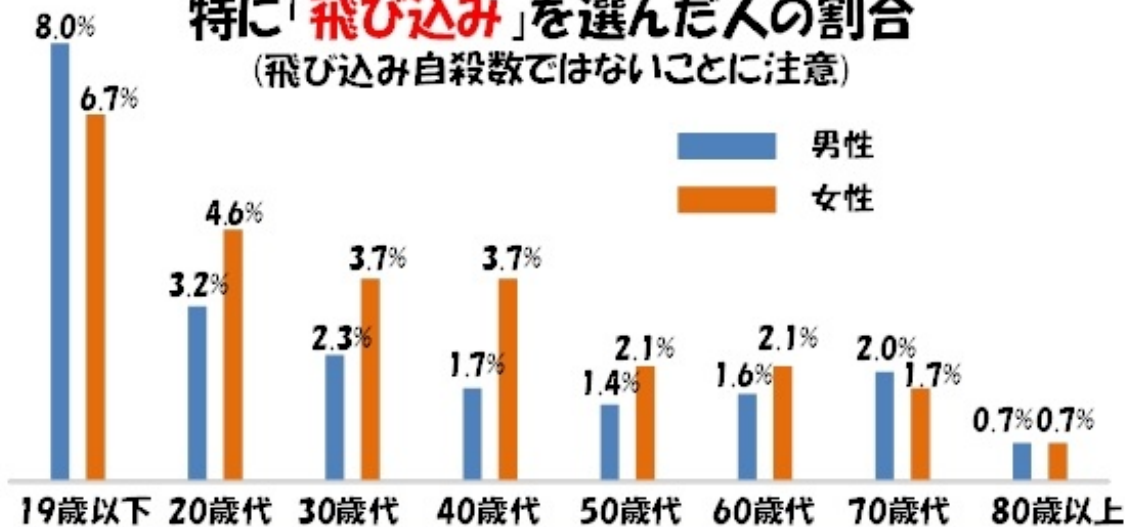
「首つり」はどの世代からも安定した人気

さすがに、年間全自殺数の65%を占めるだけあり、どの世代からも選ばれている様子が伺えます。

これに対して「飛び込み」自殺では、以下のようになりました。

各年代の「飛び込み」自殺の割合

色々な自殺の中から、
特に「飛び込み」を選んだ人の割合
(飛び込み自殺数ではないことに注意)



ティーンエイジャと女性に好まれる傾向

このように「飛び込み」自殺は、若者や女性に好まれる傾向があることが分かります。

ただし、気を付けていただきたいのは、この情報を見るだけでは、まるで「飛び込み」自殺を若者や女性がけん引しているように見えることです。しかし、それは大間違いなのです。

前述した通り、男性の自殺率は女性の2倍以上ですし、そして、私も今回調べるまで知らなかったのですが、実は、ティーンエイジャーの自殺者数は、驚くほど少ないのです。

それでは、一体誰が「自殺大国日本」をけん引しているのか？

わが国を現在進行形でリードしている、私たちの世代(40~60歳)なのです。

この話は、まだまだ続くので、このお話は次回の続きとさせて頂きたいと思います。

□

では、今回の内容をまとめます。

【1】「人身事故」に腹を立てている江端が、「人身事故」の全体像を理解することを目的として、今回から新シリーズ、「人身事故を「数字」で回してみよう」を開始しました

【2】日本の年間自殺者数「3万人(現在は2.4万人)」の数字の意味を求めて、各国の自殺率との比較を行い、その結果として、「今後、日本は世界第1位の自殺大国になるポテンシャルが、十分にある」との所感を得ました

【3】人身事故(「飛び込み」自殺)の年間統計数、長期トレンドを分析して、「飛び込み」自殺が、他の自殺と異なるトレンド(発生時期のズレや、若者や女性が好む傾向等)があることを、数字で明らかにしました

□

私は今回の連載において、今のところ、自殺の是非の問いかけや、自殺を回避する提言、生きることの意義、国の自殺対策の批判などを、展開する予定はありません。また、「世の中を明るくしよう」とか「人生を有意義に生きよう」などと主張する気持ちは、1pm(ピコメートル、10のマイナス12乗、1兆分の1メートル)足りともありません。

そんなことは、私にとってはどーでもいいことです。

この連載は、私が日常的にむりやり遭遇させられる「人身事故」という現象を、数字という1つの手段を用いて、(もっぱら私自身が)納得することのみを目的としております。

なにしろ、私、江端智一は、EE Times Japan編集部から「数字を回すのであれば、何を書いてもいい」とお墨付きをもらっているエンジニアですから。

それでは皆さん、連載新シリーズ、「人身事故を「数字」で回してみよう」をよろしくお願い致します。

(1) 電車の人身事故について、2問だけのアンケートを実施中です。

- 電車の人身事故に腹が立ったことはありますか？
- 何に対して腹が立ちますか？

所要時間は5秒程度でした(実測済み)。ご協力の程、よろしくお願い致します。⇒アンケートは[こちらから](#)

(2) 本連載について、メールで、簡単なアンケートなどに応じていただける方を募集しております。

こちらのメールアドレス(one-under@kobore.net)に『アンケートに応じます』とだけ書いたメールを送付頂だけで結構です(お名前、自己紹介等は必要ありません)。

これまで、「人工生殖」「ダイエット」について、延べ50人の方から貴重なご意見を頂いて参りました。

こちらも、何卒ご協力いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

後輩レビュー

江端:「このコラム、炎上するかなあ」

後輩:「しないでしょ。これだけはっきりと書けば*」、炎上以前に、読者にドン引きされますよ」

*) 残念ながら、その部分は、編集部でバツサリ削除されました。「公序良俗上、問題あり」と判断されたようです。

江端:「普通の人、事故の当事者に腹を立てないのかな。私の感性だけが変なのかなあ」

後輩:「そうです。江端さんの感性だけが変です。もう、そろそろ自覚してください。あなたは立派な社会の「特異点」で「異端者」です。普通の大人は、人身事故にいちいち腹を立てないものなのです」

江端:「『腹を立てるべきではない』ということは、理性では分かってはいるんだ。自分も当事者になりかけたんだし、正常な判断ができない状況で行われている以上、それは真の意味で「事故」であり、司法もその判断を支持しているしね」

後輩:「じゃあ、問題ないじゃないですか？」

江端:「私同様に腹を立てている人は、世の中には一定数いる。だが、私と決定的に違う点があるんだ」

後輩:「なんですか」

江端:「怒りの対象だよ。対象が、電車会社、勤務先の会社、政府、国や地方公共団体に向くんだよ。事故を発生当事者をわざわざ、う回してだよ。なんか変じゃないか？」

後輩:「それは道理ですよ。『死者にムチは打たない』は世界的な社会通念ですから」

江端:「『死亡によって免責されることが社会通念である』というなら、その「ムチ」が他(電車会社など)に向かうことは、その「免責」は完了していないことになる。それは、不合理で理不尽で卑怯(ひきょう)だとも思うんだけどなあ」

後輩:「で、江端さんは、その不完全さに対して、数字で理解しようとしている、と。えっと、江端さん、一体何しようとしているでしたっけ？」

江端:「人身事故による、(1)怒りの個人差の数値化、(2)私の損害額の数値化、(3)飛び込み自殺と他の自殺の差異の数値化、の、3つ」

後輩:「うーん。(2)は可能かもしれませんが。私も興味もあります。でも(1)(3)は無理ですね。」

江端:「なんで？」

後輩:「(1)、(3)は観念とか文化とか歴史とかいうものの定量化です。そんなものがロジカルに展開できるはずがありません」

江端:「そうかなあ。結局『ダメでした』の報告をすることになるのかなあ」

後輩:「まあ無理だと思いますが、やるだけやってみればいいんじゃないですか。どうせ江端さんが、何を計算して、どのようなことを主張しようとも、世の中は1mm足りと変わりやしないんですから」

江端:「……ありがとう。じゃあこのシリーズも、安心して暴走させてもらうことにするよ」

というわけで、このシリーズ、編集部のMさんは、私の過激な文章を片っぱしから削除するという作業で、忙しくなりそうです。

今のうちに、Mさんに謝っておきますね —— すみません。諦めてください、って。



Profile

江端智一(えばたともち)

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈(しれつ)を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣(しんらつ)な切り口で語られるエッセイをWebサイト「[こぼれネット](#)」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

関連記事



[英語に愛されない者は何をしても愛されない、という出発点](#)



「恋愛」が相互の想いでしか成立しないように、「英語」もまた「英語」に愛してもらわなければならない、そして、いかに残酷な結論であろうとも — 「英語」に愛されない者は、何をしても愛されない。どうでしょうか皆さん。何もかもリセットして、まずここからもう一度やり直してみませんか。



エンジニアが英語を放棄できない「重大で深刻な事情」

今回は、皆さんの英語に対する漠然とした見えない不安や、将来、海外に放り出される可能性を、「目に見える不安」、すなわち「数値(確率)」として、きっちり提示したいと思います。私たちエンジニアの逃げ道が全てふさがれていることは明らかです。腹をくくって「英語に愛されないエンジニア」として、海外で戦う覚悟を決めましょう。



EtherCAT通信の仕組みを知ろう～メイドは超一流のスナイパー!?

今回は、EtherCATの仕組みを信号レベルでご説明します。「ご主人様(EtherCATマスタ)」と「メイド(EtherCATスレーブ)たち」が、何をどのようにやり取りをしているのかを見てみると、「メイドたち」が某有名マンガのスナイパーも腰を抜かすほどの“射撃技術”を持っていることが分かります。後半では、SOEM(Simple Open EtherCAT Master)を使ったEtherCATマスタの作り方と、簡単なEtherCATの動作チェックの方法を紹介しましょう。



“なんとなく”じゃない! ビールのコクが分かるクリスタル

日本電波工業は、「CEATEC JAPAN 2013」(2013年10月1日～5日、幕張メッセ)で、サッポロビールと共同で開発している、ビールの味を定量的に評価する味覚センサーシステムを公開した。ピコグラムレベルの微小な重さが計測できる水晶の性質を利用し、ビールに含まれる「コク」につながる味成分の量を測定し、「コク」を数値化する。将来的には、ビールの「キレ」も測定できる見込みの他、さまざまな飲料の味成分を数値化できる可能性があるという。

Copyright © 2016 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

